

## 春陽会と挿絵

### 『春陽会雑報』及び石井鶴三宛木村莊八書簡から見えてくるもの

泉 ひので 由美 (大阪大学招へい研究員)

二〇〇四年に信州大学附属図書館に寄贈された「石井鶴三関連資料」の中には、日本の近代美術・近代文学双領域の研究に寄与する貴重な資料が多数含まれている。その概要や個々の資料の内容・意義については、『信州大学附属図書館研究』一号～八号における諸氏の論文によって明らかにされてきたが、多種多様な資料は数も膨大で、未だ言及されない資料も多く残されており、その中には、書簡や画稿等の肉筆資料の他、貴重な雑誌・パンフレット類等の印刷物も含まれている。

本稿では、石井鶴三が保管していた彼自身の所属団体・春陽会発行の『春陽会雑報』を取り上げ、初期の春陽会における特長の一つである〈挿絵〉に関する活動の実態を探ってゆく。また鶴三宛書簡を数点紹介し、春陽会会員木村莊八を中心に、その挿絵に対する姿勢の在り方についても考察する。

#### 一 春陽会の設立と発展―昭和十年頃まで

春陽会は大正十一年一月十四日、旧日本美術院洋画部と草土社の合同によって成立した洋画団体である。足立源一郎・長谷川昇・小杉末醒・倉田白羊・森田恒友・梅原龍三郎・山本鼎、以上七名の旧日本美術院洋画部同人を会員とし、加えて日本美術院から今関啓

司・石井鶴三・山崎省三の三名、草土社から木村莊八・岸田劉生・中川一政・椿貞雄・萬鉄五郎の五名を客員とした計十五名の芸術家の連名で同日付「設立趣意書」が公表された。趣意書によれば本会は「既成会への社会対抗として興らず 単なる芸術家の心を以て因縁相熟したるもの」「①「②「③「④「⑤」の会である。味を駆逐せんが為には 努めて革命者の意気を以てせんとする」団体であり、在野の団体とはいえ明らか官展反発を標榜はせず、明確な芸術的イデオロギーを共有しない「各人各個主義」の会であることが明らかにされている。当時の新聞においても「現在に於ては理想的の聯合個人展覧会が来春から見られる訳で今後美術界の大団体中最も芸術的で人間的な而も多彩な新空気を形作るもの」と期待が寄せられ、その船出は順調なものであった。

会の名が示すように毎年春に展覧会を開催した春陽会は、設立からわずか二、三年の間に当時の洋画壇の主力の位置を占めるようになる。川路柳虹は、当時の春陽会は帝展・二科会と並んで洋画界の勢力を三分する団体であり、「各個人の性情からいふと意見も感情も可成り相違してゐる人々が、一堂に会してゐる」が故に、進歩的・反官的ではあつても会としての芸術的主張は同一ではないことが同会の特色であるとし、また展覧会の純益金を出品者全員に分配することや公開鑑査を行なっていることなども、異色の在野団体と

しての春陽会の特色に挙げている。<sup>4)</sup>

一方で、旧院展洋画部と草土社といういわば異分子同士の合同から成る春陽会の画風が「旧美術院派諸家の近代的な——と云つて急進的とまでは行かないところの——明るい画風と、草土社系の人々の旧守的懐古的な暗い傾向との雑居からくる何となく纏りの悪い感じ」<sup>5)</sup>と受け取られることもまた当然であった。草土社系の岸田劉生の存在がまず会から浮くことになり、大正十四年の第三回展終了後に岸田が、続いて彼を客員に推挙した梅原龍三郎が同会を脱退する。岸田・梅原の脱会は打撃ではあったが、木村・中川・椿ら旧草土社系の会員（客員制は十二年に廃止、旧客員は会員となる）は慰留を決めており、会の存続に大きな影響は及ばさなかつた。

仲田勝之助は会の作風を「つゝまじやかな、地味な行方」としつつも、その「下町趣味もしくは江戸趣味」の傾向に、刺戟を西欧芸術にのみ求めてきた従来の洋画とは異なる特長を見出だしている。<sup>6)</sup> 楠木清方も、第三回春陽会展（大正十四年）に際して「春陽会に並んでゐた絵は、擬勢を張つて破鐘声で怒鳴つてゐるやうなものが無かつた」「各の持味を有るがまゝに描いて（略）いかにも親しみもてる絵が多かつた」<sup>7)</sup>と好意的な姿勢を示す。少なくとも大正期においては、春陽会は「意見も感情も可成り相違してゐる人々」が「二団となつたところに一つの対抗力も出来」る（先出注（4））団体として、当時の洋画壇を牽引するだけの實力を示していた。

展覧会における素描室および水墨室（第四回展、大正十五年）、挿絵室（第五回展、昭和二年）、版画室（第六回展、昭和三年）の設置、春陽会洋画研究所（麹町区内幸町幸ビル四階、昭和四年）の設置といった、他の団体には見られない新しい試みも相次ぎ、春陽会の躍進は昭和期に入つても続くが、順調であるかに見えた会の運営

に大きな危機が訪れる。昭和八年五月の小山敬三、裕伊之助の脱会に端を発し、翌年の会友推挙の経緯に対する疑義を起因とした林俊衛の脱会、それに連座しての青山義雄、坂口右左衛門、田中万吉ら他数名の会員・会友の脱会という、一連の内紛騒動がそれである。『読売新聞』は「会員の脱退相つぎ『春陽会』揺らぐ、洋画壇異常な衝撃」との見出しでこの事件を報じ（昭和九年七月二十日）、紙上には「こんな陋劣なやり方にはどこまでも戦ふだらうし林君を支持する人々もこれに呼応して起つだらう。そんな人達に置き去りを喰つた春陽会が何の取柄もない無能の一団体に墮せずば幸だ」<sup>8)</sup>と林支持を表明し憤る坂口の公開質問も掲載された。これに対し、春陽会側の先鋒として立つたのは木村莊八である。坂口の文章は現在の会規定款の不備を指摘するものと認めつつも「少々先方の出方は悪質過ぎる」「僕」は何と云はれてもかまはないけれども延いてそれが会に響くに及んで、いつ迄も紳士的ではゐられない」と諸々反論に及んだ。<sup>9)</sup> この内紛も未だ鎮静を見ない昭和十年五月、日本美術界を巻き込む一大事件いわゆる帝展改組問題が勃発し、春陽会も否応なしにこの問題と深く関わることになる。

昭和十年代の春陽会はこうした経緯から設立当初の勢いを失いつつあり、「春陽会は今期甚だ魅力がない」<sup>10)</sup>「澁瀬とした芸術的精神もなければ、表現意欲を感じることも出来ない」<sup>11)</sup>といった手厳しい批評も目立つようになる。帝展問題においては他の美術団体として事情は似たり寄つたりであつただろうが、会員会友の相次ぐ脱退に加え、森口多里が「油絵に関する限り、頭部を取去られたピラミッドの観がある。その頭部は恐らく帝展の方に運び去られたのであらう」と評する<sup>12)</sup>ように、帝展問題への関与によって春陽会は少なからずその体力を奪われてしまう。

だがこの間も、先述の水墨室・素描室・挿絵室・版画室といった会独自の展示形式は続いており、美術評論家の富永惣一は春陽会の挿絵出品作品について「版画挿画の部屋はいつも乍らこの会の一歩の魅力である（略）油絵につかれて来た眼をこゝで十分慰める事が出来る。女性的な線が荒くれ男のやうな油の筆触より数倍も我々に迫るものを持つてゐる」と評価し、「宮本武蔵の挿絵は氏（注、石井鶴三）の天稟を見事に示してゐる。（略）氏の油絵の方になると、かういふ冴えも弾力もぴたりとなくなつて了ふのはどうした訳だらう。木村莊八氏も油絵より挿絵の方がずっと面白い」と、その真骨頂が油彩ではなく挿絵にあることを端的に指摘する。

かかる春陽会の活動は同時代の新聞雑誌の記事によつて輪郭を掴むことはできるが、会内の諸事情や会員会友の交流については、その実態を知り得る資料に乏しかった。会員自らの手によつて編集・発行された『春陽会雑報』は、会最盛期の動向をうかがい知ることの出来る貴重な冊子である。次節では、所蔵が確認できた『春陽会雑報』から適宜記事を取り上げ、特に挿絵に関するトピックに注目し、その活動内容を検証してゆく。

## 二 『春陽会雑報』所収記事から（その一）

### — 昭和初年の春陽会動向 —

『春陽会雑報』（以後『雑報』と略記）は第六回展覧会（昭和三年）の第一号以後、展覧会の度に発行された小冊子であり、第十回展（昭和七年）までは展覧会毎に二回発行されていたが、以後は年一回となつてゐる。定価は記載されておらず、会場で来観者に無料配布されたものらしい<sup>16</sup>。信州大学附属図書館には第六回展から第十六回展

（昭和八年）の間の『雑報』十三冊が所蔵されているが、筆者が内容を確認できたのはその内の十一冊であり、これ以外戦前期に発行された『雑報』は未見、所在も不明である。『雑報』には、展覧会出品作の批評、会員会友の随筆、消息、会の活動報告、雑話など多様な記事が掲載されており、【別表】として『雑報』所収記事一覧を本稿末に付した。適宜参照されたい。

「春陽会の地位及特色」（『雑報』第一号）で、山本鼎は当時の同会の特色を次のように記す。

春陽会の同人は何れも洋風画を修業した連中ですが、今日は随意に画業を西洋画の埒外に発展して居ります。別項で放庵居士の語つて居る通り、まことに思ひくであるが洋風の移入に専らな者は一人もないのであります。春陽会の者は、素質の殺されて居る冷めたい写実を嫌ひます。又技巧を粗末にした大作を軽んじます。蓋し春陽会の特色は会員等が、前期画生活に於て悟つたところのリアリズムを経とし、東洋伝統の絵心を緯として一路邁進するところに発揮されるでせう。

会員が「西洋画の埒外に発展」させた「思ひく」の画業に励むことを同会の特色とし、放庵も同号「会員芸風」では石井鶴三を「石



『春陽会雑報』第一号表紙

井さんは院展で彫塑をやつて、春陽会で絵を見せます、挿絵室では、此室預りの立物で、大菩薩峠の連作、一時に我朝のイラストレートの面目を新たに作る、かと思ふと、春会版画室に於ても、此の人の鑑査尤も有効、恐ろしく多芸の人」と紹介し、殊に「挿絵室」「版画室」において發揮される鶴三の才能を「多事にして散乱せず、行くとして、障礙を感じぬ」とその多才ぶりを称揚する。

ただ、素描・挿絵・版画といった形を取れば絵は小型にならざるを得ず、展覧会全体の印象がいきおい小粒なものになることは否めない。春陽会展評においては当初より出品作の〈小ささ〉を指摘する声<sup>(17)</sup>が屢々見受けられたのも事実である。かつては放庵自身「百畳の大広間に一点懸けて総ての必要に応じ得るといふやうなものが相変わらず出て来ないのは残念でならぬ<sup>(18)</sup>」と語ることもあったが、これは良くも悪くも春陽会の個性である。闇雲に大作を陳列しないのは「芸場芸術なる悪趣味を駆逐」するという設立の趣意を固持する姿勢の表れであろうし、先の森田の言を借りれば、技巧の伴わない大作を並べても意味がないということになる。

これは発足以来一貫した春陽会の基本姿勢であつて、「油絵と素描」とに軽重を置かぬ春陽会の鑑別の現はれは、自づから特色となりつゝある」（森田恒友「素描と素描室」、第二号）といったように、『雑報』にも素描の重要性を強調する記事が散見される。

鶴三が「挿絵といふものは本来非常にむづかしいものです。心内の幻想を描出するものですから、眼前のものを描くよりは一層むづかしいわけです。素描の力が充分にあつて余程空想のゆたかな人でなければよい挿絵は描けません。而して文学を理解し人事百般の学問に通じて居なければならぬ」（「挿絵」、第九回展覧会第一号）と述べるように、素描は挿絵制作の観点からも不可欠なものとして認識さ

れており、会員の挿絵に対する真摯な姿勢は、素描という画業の基本を重視する会の方針にも支えられたものであつた。金井紫雲も「油の中に、デッサンや日本画や、木炭画のよいのをグイ／＼と抜いて、かうした方面の鑑賞力を聊さしめたことは、今迄の会に一寸類例がない」版画といふものを今のやうに盛にしたのも挿絵の芸術化といふことを現実化したのも、春陽会與つて力がある」（「春陽会回顧」、第一号）と、春陽会展の魅力を小品に見出だしている。

また『雑報』記事に見る限り、昭和初年の春陽会は会員同士の結束が固く、帝展や二科展とは異なる和氣藹々とした雰囲気を保っている。「春陽会は元来、何に反するとか、賛成するとか、さう云つた特定の旗幟ある団体ではなく会員間も、第一に友情を通して結ばれてゐます」（木村莊八「七年回顧」、第七回展覧会第一号）、「どんな場合でも内端の団結が固く、しつかりと結びついて、外に向つて充分に春陽会の価値を高めて来た」（田澤良夫「贅言」、第八回展覧会第一号）といった記述には会の雰囲気がよく看取される。

『雑報』の中にはやや脱線気味の記事もあり、設立十周年記念展覧会の『雑報』では「春陽会々員の血液型」という特集を組み、会員それぞれの血液型を一覧に示して、唯一のAB型である木村莊八を槍玉に挙げ「突差の場合木村君がおれの血をやるうなど、云つても、それを貰つたら大変だ。うっかり貰つたら木村君の血がわれ／＼の血管中で固まつて、血液循環に障害を来たし非常な危険状態となる」といった〈注意〉を喚起したり、架空の「ラヂオ 今日放送番組」欄なるものを設け、「おいしい味噌汁の作り方 板橋料理研究会会長 石井鶴三さんの話」や「野菜の知識 中野割烹女学校校長森山恒子刀自の御話」など造形芸術とは無関係な談話を拵えたりとやりたい放題である。戯記事といえばそれまでだが、ユーモアや諧謔味もそれ

なりに感じられ、小規模団体ならではの会員同士の親しい間柄は、会の運営上有効に働いていたらしい。なお同号に掲載された前川千帆の「春陽会十年絵史」は一ページ内に収まるものだが、十年間の沿革が一目で分かり、眺めていて楽しい作品である。

だが前節に触れたように、結成十周年を迎えて間もなく、春陽会は内紛の季節に突入する。一連の騒動の折には会員各々が肚の内に様々な屈託を抱えていた筈だが、その渦中にあつても『雑報』誌面からは不思議と不穏な空気は感ぜられない。たとえば、『雑報』第十二回展覧会号の「会員人物対評」という企画は、任意の組み合わせの会員同士が互いに相手を評するというもので、内紛の渦中では対立関係にあつたはずの木村莊八と林倭衛が対評を行なった。莊八は林を中国の仙人李鉄拐に喩えユーモラスな筆致で紹介しており、一方の林は「円転骨脱、洒脱」な「木村莊八の江戸つ子的な物解りのよさ」が好きだと述べ、「彼はいざとなれば、彰義隊の一方の大將として最後まで闘ふ男」であるとし「僕には木村莊八は斬れなかつた」と結んでいる。

この直後の五月に林は春陽会を脱退するわけだが、入稿から印刷までの時間差はあるとしても、少なくとも右の記事からは二人の間には軋轢が蟠っていたように見受けられない。来観者用の小冊子に会内の採め事を逐一報告する必要もないが、会員が直接執筆・編集



前川千帆「春陽会十年絵史」

に携わる冊子ゆえの、外部の新聞雑誌が報じるゴシップとしての内紛の様相とは異なる側面も、そこには垣間見えるのである。新聞はこぞつてこの事件を「春陽会騒動」「揺らぐ春陽会」と書きたてたが、『雑報』同号では鶴三も「近く会内に人事の出入ありて、多少動揺するところはあつたが、動いたのは枝葉であつて、根幹は微動だもせなかつた事だ。事に臨んで、ものは其真価が表はるゝもので、此事ありて、春陽会は思ひの外に其肚の据わつて居ることが明にされた」（「現代日本を代表する絵画」と述べており、会内では存外静観の構えで大した動揺もなかつたのかもしれない）。

### 三 『春陽会雑報』所収記事から（その二）

#### (1) 春陽会の挿絵および挿絵室について

改めて言うまでもないが、春陽会の会員には小説挿絵を手がけた者が多い。中でも石井鶴三や木村莊八は挿絵に関する言説を多く残しており、同時代においては鶴三『凸凹のおぼけ』（中島健吉編、二見書房、昭和十八年十一月）や木村莊八の『近代挿絵考』（双雅房、昭和十八年十二月）といった挿絵に関する著作が刊行されている。『雑報』所載の記事にはこれら単行本や個人全集に未収録のものもあり、挿絵に触れた記述も散見される。挿絵は描法としては美術領域に属する媒体でありながらも、小説テクストを直接的なモチーフとする点において、美術と文学双方の領域を結びつける接点となるものである。一般に研究対象としての挿絵は、小説に付随するパラテクスト的な要素として小説作品内部あるいは作家側の論理に取り込まれつつ論じられることが多いが、一方で画家の視点から挿絵という媒体を捉え、その制作論理や文学に対する姿勢などを明らかにす

る作業も必要であると筆者は考える。

『雑報』所載の挿絵関連記事のうち、特に重要と思われる文献は次の四点である。

- ①石井鶴三「挿絵及び挿絵室に就いて」(第六回展覧会第二号、昭和三年)
- ②石井鶴三「挿絵」(第九回展覧会第一号、昭和六年四月十一日)
- ③金井紫雲「挿絵室禮讚」(②に同じ)
- ④木村莊八「挿絵室について」(第九回展覧会第二号、昭和六年四月廿五日)

このうち①②は既に『石井鶴三全集 第四巻』(形象社、昭和六十一年)および『同 第五巻』(同、六十二年)に収録済みであるためここでは必要箇所を適宜引用することとし、③④については、かなり長くなるがその全文を次に引く。

#### ◆金井紫雲「挿絵室禮讚」

今年春陽会が特に挿絵室を拵へるさうだ、これまでも挿絵は陳列してはゐたものゝ、挿絵室といふからには、今までもより一層規模を大きくして優秀な作を陳列するといふのであらう。まだ内容に接してゐないから兎や角いふべき筋合ひではないが、現在の新聞小説が、相競うて内容のある芸術的の味豊かな挿絵を求め掲げてゐる際、其挿絵家の何パーセントかを出してゐる春陽会が、此企てのあることは誠に当然過ぎるほどである。

放庵老のその昔や鼎老の青年時代は暫く措いて、現在では、石井鶴三、木村莊八両君が先づ量に於て恐らく画壇随一に数へられやう。足立源一郎君これまた侮るべからず、最近めつきり

その数が殖えて来た。近くは碓伊之助君の挿絵の特長が中々に面白いといふ評判、長谷川昇君は長篇一度だがこれからもまんなざら色気がないでもなささうだ。

新聞が挿絵に重きを置いて来たのは、全く喜ぶべき傾向だからである。展覧会を見ない人でも、画商の店頭を素通りする人でも、新聞は拡げて読む、雑誌の拾ひ読みはする、すると目につくのは挿絵だ。その魅力は直ちにその読みものそれ自身を左右してしまう。見方に依つては挿絵は大衆に芸術を理解せしめる猿田彦の役をつとめてゐるやうなものである。大切には違ひない。

だが、挿絵界の全部を見渡すと随分鼻持ちならぬ卑俗のものがあり、又、それなくては持ち切れぬものもある。これは止むを得ぬとして、一方ではどしどし芸術的なものを迎へてゐるのだ。既に此の趨勢にある春陽会が挿絵室一室位作るのには全く以て当然過ぎるほど当然だ。



私は挿絵に就いては、横好きの一人で時々珍な作家を見出しでは悦に入る、院展の前田青邨氏に講談の挿絵を画かせてその取扱をしたのは私ばかりだらう……尤も、青邨君は二ヶ月で逃げ出してしまつたが……そんな風で古い挿絵など時々調べてゐる。都新聞の古いものなどを見ると、富岡永洗氏が三段抜きに挿絵を描いてゐる。三段ぬきといへば、今の十三段制にして六段余の大きさである。然もそれが鎧武者や、襦袢姿の女などが出るかなり手のこんだ作品である。一頁の半分が小説、でその半分が挿絵、こんな時代を見ると、今の挿絵は随分領分が減

じたわけだ、今少し挿絵を大きくする工夫はないか。

人にも依り、作にもよつて、製版にいろいろの注文があるが、新聞挿絵には、もう木版は望めない、ヂンクが精々である、それも八つ切位に書いてくるのを三寸幅の二寸位に縮めるのだから、少し細い線などは飛んでしまう、折角の苦心も見えなくなる、中にはスクリーンをかけて濃淡を見せる工夫など上手になつて、一方網目版はすたれたが、それでも原画の気持ちなり、味なりを十分には出せない「時には面白いな、原画は定めし味のあるものだらう」など、思ふことがある原画が見たい、……かうした要求に依ると、挿絵室の意義がより多く重くなり、深くなる。

挿絵の味はまた格別である。

今度の挿絵室は、こんな私の要求をどの位まで満足させてくれるのであらう。

何にしても面白い企てと、見ぬ前にまづ計画の禮讃をする。

◆木村莊八「挿絵室について」

挿絵室と云ふ名称は春陽会内でこそ珍しくないが他所では珍しいものでせう。春陽会には期せずして新聞雑誌の挿絵に出動する向きが比較的多かつたので、その「挿絵室」を展覽会毎に一室別にしてから、早くも今年で三年経ちました。然るに衰亡せず、今年も亦作らうと云ふわけです

石井鶴三の意見に依ると、挿絵室と云つても、却つて新聞雑誌の挿絵に使つたその原画のまゝ、出陳すると云ふのは資料展の意味にはいゝが、必ずしも美術展の意味には成らないかも知れないから、自分としては、日頃囑せられて挿絵を描いて居る

と云ふと、その作の中には、他日筆硯を改めてゆつくり描いて見たいと思ふ材料に出会ふことがあるので、それ等の作の類を「筆硯を改めて」描いて出陳したい。これ有るが故に展覽会の場合の挿絵室の意味がある。

と云ふ事に成る様です。事実、御覧の如く、鶴三の挿絵室の作は、あのまゝ新聞雑誌の原画に使つたと云ふものではなく、特に此の回に描き改められたものです。往年の大菩薩以来いつもさうですから、今年の南国太平記もさうでせうし、今後にかけてさうでせう。

筆者木村莊八も、此の鶴三の意見は肯がひます。然し、鶴三の所謂「資料展」なるが故に、又、此の挿絵室は一種の面白いものとする。——これを予め僕の場合は考へに入れて居ますから、前回と雖も、今回も、亦今後も、必ずしも展覽会の挿絵室の度びにこれ迄作つた挿絵の中から「描き改めやう」或ひは云ふ「描き改めなければならぬ」とは殊更に考へて居ません。挿絵に使つたその時々々の原画のまゝを、——その中から選んで——出陳していゝと思つて居ます。

で、予ねて御覧の如く、僕の此の室のものと云へば、或ひは汚れて居るとか、鉛筆で線が画されたり、胡粉の訂正もあつたりいろいろです。挿絵の戦場で働いて来たまんな姿を不取敢額に入れて出陳して見ますが——。

鶴三説と迂説と、何れを挿絵室の本旨とするとも、取捨は観者の御好きだと思つて居ます。両説共に挿絵室の意義にならうし、偶々両方があるから、益々挿絵室は賑はしくなると云つた結論に落付きはしないかと考へて居る次第です。我田引水のもりも何もなく云つて。

ところで春陽会内の挿絵現行人と云へば、連類多き中でも、殊に片や鶴三、片や荘八は、既に常習犯となりましたから、従つて出品ものも此の辺が多数に上るのは自然のわけで、別に今年と同室の出品を予測すると、裕の特色ある出品物が此回頼に新味を添へることゝ思はれます。二科会の中川紀元の如きは裕の挿絵を得るために新聞を買ひ漁ると聞きましたが一人紀元のみ考へではない筈です。

今年は都新聞のものに引続き仲間が多く出勤しましたがその先頭は倉田山中人が久方振りで特色を發揮しました。足立源一郎は都と報知とに例の生きのいゝ現代ものを手がけましたが出来を予期したものです。

時々、一般出品の中に挿絵ものが有るかと思ふ質問を受けますが、これは無い様で、無論、さう云ふいゝ出品ものが有れば採るでせう。只入選率は随分少なからうとは予測されます。

以上、未だ同室の出品目録を見ず。急ぎ記す。(九日、鑑査第二朝)

これらはいずれも春陽会の挿絵室および挿絵という媒体について言及したものである。ここから挿絵に関する問題を二点取り上げ検討してみたい。

一点目は挿絵の社会的役割についてである。石井鶴三が②で「展覽会を見る人はおのづから限られてゐるが、新聞は見る人の範囲がずつと広く、その人々の多数は僅に挿絵によつて絵画を味ふ機会を与へられてゐると云つてよいのですから、新聞の挿絵は考へやうで責任の重い仕事だと云へます。挿絵を馬鹿にするのは多くの民衆を馬鹿にすると同じ」と述べ、また金井紫雲が③で「展覽会を見ない

人でも、画商の店頭を素通りする人でも、新聞は拵けて読む、雑誌の拾ひ読みはする、すると目につくのは挿絵だ。その魅力は直ちにその読みものそれ自身を左右してしまう。見方に依つては挿絵は大衆に芸術を理解せしめる猿田彦の役をつとめてゐるやうなもの」と述べるように、ここでは挿絵は、民衆(大衆)が絵画という芸術を味わい理解する役割を担うものと捉えられている。挿絵という特殊な媒体を展覽会の場で展示する目的は、一つには所謂会場芸術と挿絵との間の区別をなくそうとすることにあり、挿絵室は新聞を通じて挿絵という「芸術」に触れた人々を展覽会へと誘導する機関としても機能していたことになるだろう。

挿絵室は昭和初期における春陽会展の呼び物の一つとなり、鏑木清方も挿絵室に注目しその必要性を主張していた一人であった。啓蒙といつてはおこがましい響きにならうが、機能面から見れば挿絵室は芸術というものの敷居を低くする役割を持つものであり、裏を返せば、それは挿絵という媒体の芸術性を高めることに結びつく試みでもあつたのである。

次に挿絵の「原画」観について。③で金井が「少し細い線などは飛んでしまう、折角の苦心も見えなくなる」という挿絵製版の問題に触れ、「時には是は面白いな、原画は定めし味のあるものだらう」などと思ふことがある。原画が見たい」として、挿絵室における「原画」の展示を求めているのに対し、鶴三は②で「新聞の挿絵を見て人はこの原画が見たいと云ひます。小生の新聞挿絵は紙面にあらはれたものが原画です。(略)それから製版印刷の過程を経て紙面に刷り出されてはじめて完全な画となるのです」として、画稿はあくまでも版下であり「原画」として見られるのは不服であると述べている。



『春陽会第九回展覧会目録』によればこの時鶴三が出陳したのは「南国太平記さしゑ十五点」だが、鶴三は「こんど展覧会に私はこの版下は出しません。挿絵の仕事をして居る間に、新聞の挿絵といふ事から離れて単独に描いて見たいと思ふ画材に屢々ぶつかりました。かくして出来た絵を出品したのであります。絵の性質から云へば挿絵ですが、実用をはなれて純粹に作画衝動によつて描いたものです」(②)といい、これらが新聞連載時の挿絵とは異なるものであることを明らかにしている。

これはあくまでも一般論だが、当時の製版技術が原画の描線を完全に再現できないのであれば、印刷前の画稿を見たくなるのが人情というものだろう。挿絵室の鑑賞者の中には、新聞紙面の挿絵の元の状態を確かめに訪れる人も少なからずいたのではないだろうか。金井の要求がこうした一般観衆側の立場を代表するものであるとすれば、一方の鶴三は挿絵制作の当事者としての一つの見解を示したものだ。この問題においては莊八は金井寄りの見解を持っていた。「鶴三の意見は肯がひます」としつつも、「汚れて居るとか、鉛筆で線を描かれたり、胡粉の訂正もあつたり(略)挿絵の戦場で働いて来たままの姿」を出陳するという莊八の姿勢は、凶らずも金井のような一般観客の要求に応えたものといえるだろう。

だがそもそも鶴三の出陳作は当初より「あのまゝ新聞雑誌の原画に使つたと云ふものではなく、特に此の回に描き改められたもの」であり、「往年の大菩薩以来いつもさうですから、今年の南国太平記もさう」だといふ。つまり挿絵室設置以来鶴三は連載時の挿絵をすべて描き改め出陳していたのであり、ある意味それらは新聞に掲載された挿絵とは別の作品ということになるだろう。

しかしいづれにせよ、描かれた挿絵を「版下」と見るか「画稿」

と見るかは善し悪しの問題ではなく、莊八が「鶴三説と迂説と、何れを挿絵室の本旨とするとも(略)両説共に挿絵室の意義にならう」と述べる通り、挿絵という媒体のもつ芸術性を世間に認めさせるといふ点においては、両者の目的は同じなのである。

第七回展(昭和四年)に出された島崎藤村「破戒」の鶴三挿絵三点は、かかる鶴三の挿絵観を体現した例である。これらは『石井鶴三展 芸道は白刃の上を行くが如し』(松本市美術館、平成二十一年十月)に『破戒』口絵・装画(決定稿)として掲載されているものだが、それが実際どのように使われたのかは未確認であり、あるいはこれら三点の挿絵は本の装幀用として何らかの求めに応じて制作されたものではなく、鶴三が「実用をはなれて純粹に作画衝動によつて描いたもの」だったのではないか。『雑報』第七回展覧会第二号「自分の出品」において、鶴三は「破戒」挿絵を「信州飯山へ行つて『破戒』をむさぼるやうに読みながら描いたもの」だと明かしている。文学テキストを基に制作されたものは総じて挿絵と呼ばれるが、日々進行する連載小説との併走で描かれる挿絵とは異なる、ひとえに鶴三個人の文学的感興によつて生み出されるものもまた、挿絵室を飾る芸術作品の一つなのである。

## (2)春陽会における〈外交〉活動

前項③の筆者金井紫雲は『都新聞』学芸部の記者であり、『雑報』の常連執筆者として展覧会評などを寄稿しているが、『雑報』には金井以外にも、田澤良夫(毎夕新聞)、時岡弁三郎(東京朝日新聞)、外狩素心庵(中外商業新報)ら新聞記者の文章が散見される。春陽会は第一回展覧会より出品作の鑑査を新聞雑誌記者に公開していたため、こうした新聞社との繋がりも自然生まれたのだろう。田澤良

夫「事務室の小半日」（『雑報』第八回展覧会第二号）には彼らの親密な様子が記されている。

事務所をのぞくと、長谷川君と金井紫雲君とが、コップで熱燗をチビリくくとやつてゐる。足立君は幹事長格でいろくいな人に逢ひながら、コップを手から離さない。僕も勿論お仲間に入つた。今日は酒豪放庵君と、林君の顔が見へないが、酒量では人後に落ちない長谷川君が、総代格で徳利の数を段々と増して行く。其処へアトリエの北原君と藤本君が来た。（略）

アトリエの一行が帰ると、入れ違ひに美術新論の岩佐君と、牧野虎雄君とがやつて来た。岩佐君は相当に飲める口だが、今日はどうしたのか遠慮してゐる。（略）

とうく閉場を知らせるベルが鳴つたが、誰れもお神輿をあげやうとしない。

ここには、新聞社以外に『アトリエ』『美術新論』といった当時の美術雑誌記者の名前も見える。大正十三年創刊の『アトリエ』主幹・北原義雄は詩人北原白秋の弟である。また白秋の妹（義雄にとつては姉）と結婚した春陽会会員の山本鼎は義雄の義兄にあたり、それゆえ同誌には春陽会系の記事が多く、「当初は春陽会のお提灯と眺まれた」こともあつた<sup>21</sup>というが、いずれにせよ右の記事には春陽会と新聞雑誌メディアとの活発な交友の実態<sup>22</sup>がうかがえる。

こと挿絵に関していえば、こうした記者との付き合いから春陽会の画家に仕事の依頼が持ち込まれることもあつたようだ。金井紫雲が「碓伊之助君といへば、此の間、僕の処で、小説の挿絵を画いて貰つた。碓君臍の緒切つて以来のこと、然も、その舞台が北海道と

来てゐるので、チャキくくの江戸子たる碓君の面喰ふこと一方ならずだが、出て見ると大当り、好評噴々、時に毛筆の代りに、一寸版画で気分をかへるなど、今までにない挿絵技巧を凝らして、大向を「呀つ」と唸らせる」（『元氣無頼禮讚』、第八回展覧会第一号）と明かすのもその一例である（碓が挿絵を担当した小説は未見）。

金井が言う「小説の挿絵」と一致するものかどうかは不明だが、先出④荘八が「二科会の中川紀元の如きは碓の挿絵を得る為めに新聞を買ひ漁ると聞きました」というように、碓の挿絵は同業者の目から見ても出来の良いものだったようである。また同じく④に「今年には都新聞のものに引続き仲間が多く出勤しました（略）足立源一郎は都と報知とに例の生きのいゝ現代ものを手がけました」とある通り、特にこの年は多くの挿絵が会場を飾つた<sup>23</sup>。その全てが春陽会出入の記者が斡旋した仕事というわけではないだろうが、少なくとも春陽会の画家が『都新聞』の連載小説挿絵を担当したケースにおいては、金井紫雲が何らかの媒となつて動いた可能性が高い。

新聞小説の成立経緯は個々の作品によつて様々であり、そこに記者が関与することも何ら不思議ではないのだが、その小説の成否は当の小説家と挿絵画家の実力以外に、新聞記者の働きによつても大きく左右される部分があるのではないか。戦前期の美術に関する言説は、造形美術の作り手や専門の評論家によるもの以上に、新聞各紙が抱える美術担当の記者によつて著されたものが多い。記者という裏方の仕事ゆえ表面には出にくいケースも多いが、美術評論の書き手としての嗅覚が、新聞小説と挿絵のマッチングにおいて何らかの形で発揮されることも当然あつた筈である。

筆者は、新聞小説という媒体の成り立ちを検討する上で、文学側の論理のみに集約しきれない様々な要素は、一方の美術領域の諸資

料にまだまだ数多く埋もれているのではないかと考えている。

画家の視点から挿絵に言及した『雑報』の記事はその意味でも重要な資料であり、鶴三が保管していた『雑報』の如き小冊子類に関する調査は今後も継続して行ないたい。

#### 四 石井鶴三宛木村莊八書簡より

「挿画といふものの社会的地位を高めた、といふよりも新聞挿画に革命を与へたのは大菩薩峠で石井鶴三氏、西遊記の小杉未醒氏、富士に立つ影での木村莊八、川端龍子、河野通勢（初めに一寸山本鼎氏）の諸氏あることは衆知の事である」という評言を引くまでもなく、石井鶴三と木村莊八を名実ともに春陽会を代表する挿絵画家とみなすのは至極妥当な評価であろう。先述の如く春陽会では度々の内紛により会員間の対立を生じることもあったが、画業のみならず会務諸事をも共にした鶴三と莊八の親交は終生変わらず続いており、そのことは「石井鶴三関連資料」に相当数含まれる鶴三宛木村莊八書簡の存在にも明らかである。書簡の中にはメモ書きに近いものや、消印がなく執筆時期を特定できないものも多く、その全容の把握は今後の調査に委ねなければならないが、本節では特にその中から木村莊八の挿絵画家としての活動開始期に当たたる大正十四年及びその円熟期に当たたる昭和十五年の書簡を紹介し、莊八の挿絵に対する意識の在り方を探る端緒としたい。なお「仮番号」は右コレクションの資料整理のために付された番号である。

##### (1) 石井鶴三宛木村莊八書簡（仮番号「馬場38—72」）

便箋 毛筆

大兄の画大ひに面白く拝見今日のは画

セン紙と思ひますが

小生には矢張りスミの

「黒く塗りつぶし」かうしみた工合

のところ かう云ふと

ころがやはらかくて此の

方好みです 然し概し

て小生は挿絵ものには画家の写実味を肯とせず

絵としての味感を第一にお

いて描きます為如上やは

らか味など重んじる心にな

りますが

大兄の画はかなり

そこに写実味が重んじ

られてゐると思ひます

龍之助が刀を見てゐる図

などその点感心しました

——或はこれには例へば

こんなカタイ紙でも却って

効果が上りはしまいかと思ふ

河の工は全然描写力

一つで行つてゐると思ふが、す

るとチビ筆にカタイ紙なども

却って効果を確かめるに役

立つ様思はれます 因に小

生は筆を「筆先の絵」今

此の字をかいてゐるこれが円大

の羊毛筆ですが又

「筆先の絵」こんなマキエ用の筆をアウ

トラインに使ひます クナクナするところから

一種変な味が出るので好み

です 然し画像が少しコンで

来てつまりリアリステイックになると

「筆先の絵」こんな（今用ゐてゐる）普通

のわりにカタイ筆を使ひます いろんな事をして

見ますが、今日から又例の通り追ひ

かけ原稿が一日一つづゝ出て来て、執筆

初めました（世間のエは殊に近頃稍もすると

は素描がないので心を引きません）

大兄の画、今の世に稀れに素描

が立つてゐるので全く心うれしく拝見

小生は全く白井と云ふ方の文はイヤだ

と思ふのだが只マア毎日何かしら題が来て素描を引く好個の

練習に今の

仕事喜んで引受けてゐる次第ですどうも

つい画像にリアリステイックな傾きを入れ

ると小生のエは死にたがるので、前記した

様にいろくやつて見ました、結局今

のところ画セン紙に羊筆、細筆と云ふ

様な工合へ落付いたところす——恐らく

は大兄も種々ご経験のところと思ふ御

洩らし下さる様希望します

以上一寸、一昨夜失礼しました

石井兄几下 莊八

僕は大兄の、恐らくはケントにコンテと

思ふあの洋画式も好きな一人です

雨中杉並木の累な

どは乾筆の

方がよくは

ないかなど

とも思つ

た

「受信者」府下板橋中丸／石井鶴三兄

「発信者」本郷／木村莊八

「日付」なし

「消印」本郷／14・1・16／□□—□

「大兄の画大ひに面白く拝見」「龍之助が刀を見てゐる図」という

文言および消印の日付から、これは『東京日日新聞』『大阪毎日新

聞』夕刊に掲載された中里介山「大菩薩峠」無明の巻（大正十四年

一月六日～五月十二日）連載開始直後の鶴三挿絵に対する感想を述

べたものと分かり、「龍之介が刀を見てゐる図」は一月八日付、「雨

中杉並木の累」は一月十日付の挿絵をそれぞれ指すと思われる。紙・

墨・筆・コンテなど画材に細かく言及しているのは、印刷された紙

面上の挿絵に表れる効果を考慮したものであり、莊八は日々鶴三の挿絵に注目すると同時に、様々な画材を試しながら、「写実味」の鶴三に対し「絵としての味感」「やはらか味」を独自の画風として確立しようと模索していた様子がうかがえる。

莊八は、この時自分が描いていた『報知』の「富士に立つ影」の挿絵についても言及している。「素描を引く好個の練習」とは軽口のようにもあるが、これは挿絵を引き受けた当初は「山」また山一本槍で通し<sup>25</sup>ていた莊八の純粹画家としての精進の姿勢でもあり、彼が素描を重視する春陽会の方針を堅持していることの表れでもある。「追ひかけ原稿が一日一つ」とあることから、本作は予め先の構想が判明しているわけではなく、挿絵は小説の執筆と併走する形で描き進められていたらしい。莊八は作者白井喬二について「小生は全く白井と云ふ方の文はイヤだ」と私信ゆえの率直な心情を吐露しているが、その日その日の「題」をどこに見出だすべきかを考えながら日々の小説テキストに対峙するという、挿絵画家に要求される勘所のようなものを、この時の莊八が既に備えていたことも文面からはうかがえるのである。

(2)石井鶴三宛木村莊八書簡(仮番号「馬場38-74」)

鶴三貴兄

お手紙拝●見 僕

のは近頃中国の友人からエをかゝせられる為めに送り越されたのを使つてゐるわけで気に入つてゐます、実は僕も今手元にあるのがなくなると当座困るだらう

便箋 ペン書き

と思ふのでより／＼売り所を探してゐるわけですが、此の間渋谷の百軒店にある<sup>不明</sup>屋

へ行つて見ると、どうもその紙の見本帖に手近かにありさうですその他バンスイ軒等にはあると思ふが、質

は比較してどんなものですか、何しろ普通ある画センより●紙のネリのいゝことはたしかです、少しですが丁度挿エの為め細く切つたのがありますから別封筒に入れて届けます御試用如何、

報知は今日で小生の分終りました、此度は少し急かれて出来不出来でした。作者が

風邪中だと云ふのです、昨日の原稿を持って来て使

ひが待つてゐてかゝせられる等は感心しません、

尤も病キは止むを得ませんが。御示しの

「別紙貼付」此の紙は僕は紙質の「縦線四本」から

云ふセイが寒く、スミの引

きも変に早いので感心しないの

です・「縦線四本」がよくなつて羽二重

の様にネットリすると此の紙上乘と思ひます、

然し果して何れが煮碓として上に当るのかは知ら

らないのですが

ロール半紙は御使用絶対、に御すゝめ出

来ません、イヤな封筒へ筆で字をかく感

じと思へば、その辺と思ふ、不愉快です、河

野のは殆んどどんと硬い模造紙で、例へ

ばハガキへ毛筆でかく様の感でせう僕には

之れも出来ないのです「以下挿入 河野は画像の筆をそののみを

立て、味にはかまはず描く一手だから

出来るのだと思ふ」御示しの貴君の半紙

は少しカタすぎる様に思ふが然し多分かき

いゝでせう

何しろこんなせんさくは■に全く面白いの

で楽しみです、一番初めには紙をあれこれと

迷つてずい分かきちらしました、

報知は(多分)日々のまねをして此度画形

を大きくしたので、実は少し画像をリアリスティ

ックにして見やうと思ひ、(筆先の絵)こんな筆で

二三次かいて見ましたが、之れは失敗の様です絵がチビていやだ

(粹外・十七日あたり出るでせう)

それから面相筆だが鳩居堂にある黒チク

赤紙貼りの(筆先の絵)かう云ふ懸針と云ふ

筆は中々いゝ様です、僕は鳩居堂のそば

へ行くとは買つて来ます、シンカキと面相の中

間を行った出来で、時々欲しい筆です、

以細万々又

附

然し筆の事を云つたり紙の事を云つたり、こん

なセンサクをしてゐるとつい面白いので中々凝る。然し

大体に於ては筆も紙も何でもいゝ様の気は何所

かにあります マア時々凝るので何彼といゝものに

は出逢ふが一方ずい分乱暴です、油工でも何

でも何れにも同じで、何しろ、絵の事は大小によら

ず面白いものですネ 昨日は友人とテムペラの話をし

ましたが少しテムペラをやつて見たくなつてゐます、

又お目にかゝつて種々語りたく思つてゐます 河野

も貴作感■<sup>(鑑カ)</sup>して此の間話してゐました、

貴君は草双紙等好みではありませんか、

僕は国貞、英泉等の●挿画ものは又一境のもの

だと思つていつも感心します、素描を立たせて絵を

かき込んでさへ行けばする仕事はいくらもあると思ふ、

フランスの絵はどうもそこを横へ広がりやすいので何所

かで行きどまりの気がします

「受信者」府下板橋町中丸／石井鶴三様

「発信者」木村荘八

「日付」なし

「消印」本郷／14・1・16／□□—8

消印は書簡(1)と同じ日付であり、内容もおそらくは(1)の書簡に対し鶴三が荘八に送った何らかの質問に対する回答である。紙をあれこれと迷つてずい分かきちらしました」とある通り、この時の荘八は特に挿絵に用いる紙について試行錯誤を繰り返していたようである。「報知は今日で小生の分終りました」以下四行文の叙述は「富士に立つ影」の進捗状況に関するもので、荘八の挿絵担当は大正十四年一月十一日から十九日(前後の担当はそれぞれ川端・河野)、「小生の分終り」とあるのは即ち十九日(182回)の挿絵のことである。白井の風邪で原稿が遅れたため、急かされ不出来な挿絵もあったようだが、この間の荘八挿絵を見ると日によつて出来不出来の波が大きいという印象は受けない。「少し画像をリアリスティックに見

やう」と試みた「十七日あたり」の絵も失敗だったと言い、莊八自身は不本意な点を具体的に自覚していたのだろうが、いずれの回の挿絵も一定のレベルは保たれているように思われる。こうした内省的叙述からは、莊八がゆめ疎かな気持ちで挿絵制作に取り組んでいたのではないことも推察されよう。書簡末尾の国貞や英泉の草双紙挿絵への言及も、「フランスの絵」は「何所かで行きどまりの気が」するという一節と考え合わせれば、莊八の中ではこの時点で号数の大きな油絵よりも、寧ろ挿絵という絵画様式への関心の方が優っていたことによるものではないか。

「筆の事を云つたり紙の事を云つたり、こんなセンサクをしてみるとつい面白い」「油工でも何でも何れにも同じで、何しろ、絵の事は大小によらず面白いのですネ」という叙述は、展覧会芸術への反発や素描・水墨画といった小品にも重きを置く春陽会の方針とも合致するが、そのような芸術上のイデオロギーを云々する以前に、莊八は絵の大小や素材・技法に関係なくただ絵を描くことそのものを楽しんでいように見受けられる。

(3) 中川一政(石井鶴三)宛木村莊八書簡(仮番号「馬場16-59」)  
書簡末尾に「この便御読過の後鶴方へ転送おき下され度候 木生」と記載があることから、本書簡は莊八が中川一政へ書き送った書簡を、莊八の依頼により一政が鶴三へ転送したものと判断される。

便箋 ペン

昨夜ノ会合は酔漢乱入して少々ぶちこわされの形なりし あのオヤジ好人なれど一病あつて困ることなり 佐藤が会の申込をあすこへ伝へ忘れていせげんにとつてハ突然となりしたためオヤジめんくらひ(実

にめんくらひしことなるべし) それでも無理に都合せしが切角の春陽会によくサービス出来ぬといふにて心配さし結果酔ばらひたるものゝ如しこのこゝろあわれなりしかしわれ等ハ困りたり

佐藤近頃諸事につけてうつけ、これも困りたり

あれは結局下根のものなる如し研究所ノ当時

加瀬さんの手下(?)となり研究所閉鎖を早めしめたる

効績(?)もありしとのこと、今は昔のことながら、

右様下根、とすと共に高ずるかに見えて哀れにも

事務上支障あり、困りたり、近頃会(上部)にて

栄道の見込絶へしを思ひくさりてサボタージユとなる

しかし思へば十年のことなればなかく持ち

こたへざらん代人あればよろしき也これハ勘考しつゝあり

只会務支障あるを恐る、

画談会近頃試験ありて会員をAクラスBクラスに

分ちしが僕は「軍配の絵」にて加じ、岡、高田、原、中谷、二見等々

決裁、佐藤はBクラスとなりたり Bは今後一時||三時にて

終り専ら会はAの上昇討議を主調とす

思ふに佐藤サボタージユこの辺を近因とせんか、諸事最もうつけた

り 只そのうつけ方に下根のはたらきが伴ふを●憂うるのみこれハ彼の

Bクラス

を正義化<sup>ジャスティファイ</sup>するものなれば也 哀れむべきかな

近頃会内会友元気の処に新会発起ノ議あり

原等主動となる 専ら芸術運動なれば僕ハ賛しおり、

これにも亦互陽会とのマサツ等若干あれど互陽は古し新会

は新しければ新をして行かしのめるが良策なる如し更に九夏に至つてハ最古なればこれハ却つて之等の機に只の会友交渉機隣組的存在となすこと、可と思ふ

又近頃岡本の息太郎に關して会にも關する

微妙人事ノ話ありて、これが放庵に關係し右ノ会友新會に關係し、岡に關係し……引いて春陽に關係すべく旁々旧友一平に關すべく一つのテーマあるなり

折も折放庵その中閑話一會なさんと云ふ

その機はよければ以つて右様のいろんなこと打話しわれ等相諒解いたしおき又対案定めおき●たく

僕は考へてゐる

日時を放老と相談すべければ都合の日に放、中、石、木出来れば足立、以上の閑話會開くべきこと、お心おき願ふ

どつちみち昨夜は新年會なれば會用談は少なかりしとしても

あんなわけで少々失敗會となり僕の會の報告談なすチャンスなくワヤ／＼となる、これは印刷せん、右のいろんな話はこれは微妙も●ふくむから昨夜はどのみち

出来なかつたとしてもそれより以上に残念に互ひの話出来なかつたかゆので、

一寸手紙に記すものなり

この便御讀過の後鶴方へ転送おき下され度候 木生

附

僕雪俗以後の都にかて、加へて日々新出現し矢張り

好きと見えて殊に新聞も版ものり気なればこの仕事に

精出しまだペース整はねばその手さばき中にて

新年以来「さし系」にかまけたり 漸くペース手心付く

如ければこれより画生活を平らならしめんと思ふそれを平らならしめんとせし処へ突如来りしさし系波なりければこのさばき難かしかりたり、しかし一先づ本格本腰にかゝりたり都の方が

ペース整へし処へ突差日々現はれしかば此の足ぶみ瀕ぶみに

存外時間かゝりたり 見てくれて居るや、日々の画はあゝ云ふ

テキストにはあの画日本の新聞として第一級ならんと考ふ、版もカントクしつゝあり、追々よくなる見込も凡て「ミセケチ」のレベルをつけておく

つもりなり、それにはテキストも却てよし かねて僕は徳富氏の国民史の

エを受持ちたいと思つてみたので、それを試みる、画料も恥しめず、これ等のこと面談

例によつて参考書本格のもの沢山あつめたり

予もバクマツガクシャとなる如しいつでも用立つべし

〔受信者〕板橋区中丸／石井鶴三兄 直披

〔発信者〕杉並区永福町／中川一政（中身は木村莊八からの書簡）

〔日付け〕一月二十日（封筒に裏書き）

〔消印〕□□／16・1・20／□□□□

書簡(3)は(1)(2)から十六年後の昭和十六年一月に書かれたものである。書簡の大半は會務に關する内容で、會友新會発起の議案や人事等に關する用談の機會を持ちたいという申し入れを一政經由鶴三に伝えたものである。新年會と思しき「昨夜ノ會合」が「酔漢乱入」（誰を指すかは不明）のせいで打ち壊しになり、席上會務報告も



ろくに出来なかつたためらしい。

興味深いのは、右の本題に続く「附」の部分である。「雪岱以後の都にかへて、加へて日々新出現」とあるのは、昭和十五年十月、『都新聞』に連載中の林房雄「西郷隆盛」の挿絵を担当していた小村雪岱が急逝し、八十六回で中絶した雪岱挿絵の後を承け、莊八が本作の挿絵担当になったこと、<sup>(26)</sup>加えて『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』夕刊の連載、菊池寛「天誅組罷通る」の挿絵を引き受けたことを指す。二つの連載を抱えることになった莊八は仕事のペース調整に苦心しつつも、「日々の画はあゝ云ふテキストにはあの画日本の新聞として第一級ならんと考ふ」という自負と、「版もカントクしつゝあり」と製版の仕上がりにも目を光らせる拘りを見せ、年明けから挿絵の仕事に没頭している。

「富士に立つ影」で様々な試行錯誤を繰り返し、その後も多くの新聞雑誌の小説挿絵を描いてきた莊八がここに来て到達したのが、「矢張り好きと見えて殊に新聞も版もの気なればこの仕事に精出し(略)新年以来さし懸にかまけたり」という境地であった。書簡(1)(2)から(3)に至る間の莊八の仕事については、個々の小説作品ごとの詳細な検討に基づきそれらを通時的・共時的に位置付けてゆくという作業が今後必要なことは言うまでもないが、莊八が途切れることなく挿絵の仕事を継続してこられたのは、突き詰めれば「好き」の一言に尽きるからであろう。脇本楽之軒が第四回春陽会展(「たけくらべ絵巻」出品の年)の展覧会評(先出注(22))で「木村君の絵を見ると、この人は三度の飯よりも絵をかくことがすきなのだらうといふ感じがする」という印象を述べているのは、蓋し慧眼といふべきである。

#### (4)石井鶴三宛西田武雄書簡(仮番号「馬場38-76」)

最後に、大正十四年十二月京橋室内社画堂において開催された「墨画小品展」に関する書簡をいくつか紹介しておく。右小品展の概要と問題点については、松本和也「墨画小品展と「大菩薩峠」挿絵―新出石井鶴三宛中里介山・西田武雄書簡から」(『信州大学附属図書館研究』第三号、平成二六年一月)に詳細が論じられており、本論で付け加えることは多くないのだが、展覧会開催に至る経緯を記した書簡を次に示し、考察を加えておく。

#### 前略

油土拾キ口金參拾円也本日御届け申上候

此の者に代金御渡下され候ば有難く存じ候

就ては六日木村莊八氏を御尋ね致候この秋挿画

風の展覧会開催仕り度御相談申上候処大變贊

成下され一つの画題(例へば坂崎出羽の守或は

お国五平又は佐倉宗吾)等の主題にて前半

を先生に後半を木村氏にとか描いていたたいて

みたらば甚だ興味あることと、お話に相成り小生も

大賛成にて早速御邪魔仕り度存じ居り候へども

多忙のため御邪魔致しかね居り候

近日中に木村氏が先生を御尋ねなざる由うけ

給りおり候、小生も近日中に御邪魔致し度存じ

居り候 先生御承たく下され候はば木村氏先生

と三名にて夕飯を共に打合せ申上げ度御つがふ

のよろしき日を御一報願度御待ち申上候

便箋 ペン書き

従来になき展覧のことゝて非常に好評を得ることゝ存じ候、写真版にして新聞「新 ミセケチ」紙上に表れると異り一層興味あることゝ存ぜられ候  
 画題はいづれ三名にて御相談申上度候  
 期日は今秋帝展開催中位のところがよろしからんと存じ候 よは御目にかゝり<sup>(不明)</sup>々々御相談申上候

此の者にご都合のよき日御知らせ下され候はゞ  
 木村氏の方へ御知らせ申上候度存じ居り候  
 十●三日の月曜日の午后五時頃当方まで  
 御来社願へまじく候や 当方は何時にてもよろしく候

室内社画堂主人

西田武雄

七月七日

石井鶴三様

〔受信者〕 府下板橋中丸二六五／石井鶴三様

〔発信者〕 東京市京橋区北横町十八／日米信託ビルディング二階／室

内社（印刷）

〔日付〕 七月七日

〔消印〕 なし

差出人の西田武雄は室内社画堂の創立・経営者であり、「墨画小品展」の主催者である。先出松本論文では本展にかかる鶴三宛西田武雄書簡の一番早いものは大正十四年九月と想定されているが、右書

簡は消印はないもののその内容から同年七月に執筆されたものと判断される。以下要約すれば、六日木村莊八を訪ね、今秋挿絵の展覧会を開催したい旨相談したところ莊八の同意を得られた・莊八からは、一つの画題の前後半を鶴三と莊八で分担する案が出され、西田もこれに賛同・近日中に鶴三宅を訪うという木村に西田も同行し、夕食を共にしながら改めて画題を三人で相談したいという申し入れが西田の用件である。

当初の莊八案はいずれかの時点で立ち消えとなり、この後小杉未醒も加わって右の小品展が開催される。その内容も先出松本論文に示されているので詳述は省くが、大菩薩峠挿絵（鶴三）、清水次郎長挿絵（未醒）、富士に立つ影挿絵（莊八）といったように出品作はいずれも小説挿絵である。ただしこれらは紙面に掲載された挿絵の原画ではなく、「一度版にされた絵を各画家が再びそれと同じものを画仙紙に描き或ひはそれに淡彩を施しなどして鑑賞用の絵」としたものであった。<sup>27)</sup>

以下は紙幅の都合上必要箇所の抜粋（／は改行を示す）となるが、鶴三宛莊八書簡（仮番号「馬場16—212」、〔受信者〕 府下板橋／中丸／石井鶴三様、〔発信者〕 木村莊八、〔日付〕 九月十一日出、〔消印〕 □□／14・9・11／□□、原稿用紙・毛筆）では、莊八は鶴三に「貴兄は室内社の／ものに何枚位ひかゝ／れますか？又着彩／等如何ですか、予定／御知らせ下さい／僕は十枚<sup>(不明)</sup>之れ、／然し図はもつと出来／るでせう飛び／くに／勝手のところをかく／でせう少し着彩／もやります 主に紙／のつもり、然し大体歩／調をそろへたい」と尋ね、出品作の偏りに配慮しようとしていることが分かる。

「大菩薩峠」の作者中里介山の絡むトラブルを内包しつつも、この

小品展は盛況であり、「従来になき展覧のことゝて非常に好評を得ることゝ存じ候、写真版にして新聞紙上に表れると異り一層興味あることゝ存ぜられ候」という西田の当初の目論見も達せられることとなる。本展の意義は松本論文に指摘される通り「挿絵を芸術として扱う、という振る舞いによつて果たされた、挿絵の芸術化をめぐる歴史的な一コマ」となり得た点にあるが、私見を付け加えれば、この「墨画小品展」は、大正から昭和戦前期にかけての春陽会ならびに同会会員の〈挿絵〉との密接な関係性構築の基盤となった点においても、重要な意味を持つのではないだろうか。本展の成功がそのまま春陽会の「挿絵室」設置に直結したわけではないとしても、一度挿絵として製版された絵と同じものを描き直して鑑賞用の新たな作品とするという「墨画小品展」の制作方法は、のちの春陽会挿絵室における鶴三の出陳と同じスタイルである。挿絵が「他の種類の絵画と同じく、絵画として、立派に独立した作物」（先出「挿絵及び挿絵室に就いて」）であるという鶴三の自覚は、この小品展を機として明確なものとなったように思われ、挿絵室の構想にはずみをつける一因となった可能性は高いと考える。

本論では、昭和戦前期に画壇の一勢力として鼎立した春陽会の概要と挿絵室という独自の試みに言及し、展覧会毎に発行された小冊子『春陽会雑報』から挿絵に関する言説を中心に、会の動勢をうかがう上で重要な記事を抜粋し考察した。莊八が「挿絵黄金時代」と呼んだ大正末から昭和戦前期にかけての約二十年間は、設立から画壇の中堅としての存在感を示すに至る春陽会の歴史にそのまま重なるものである。春陽会の画家の中でも、取り分け挿絵制作に当たって原作の小説を「むさぼるやうに読」んだ鶴三と、挿絵が好きで「こ

の仕事に精出し」てゆく境地に至った莊八、今後は両者の諸作に注目し、彼らが文学という異分野の芸術と美術家としての自己の作画衝動を如何に折り合わせてゆくのか、より詳細に検討してゆくことを筆者の課題としたい。

（本論文はJSPS科研費19K00291、20K00288、20K00346の助成を受けたものである。）

## 注

- (1) 『春陽会七〇年史』(社団法人春陽会、平成六年七月) 七三頁。
- (2) 小杉未醒「我々は各人主義の集団である」(『読売新聞』大正十一年一月十五日、日曜附録)
- (3) 無記名「洋画壇の革新聯盟『春陽会』成る 今日燕楽軒で初顔合せ 明春から理想的展覧会」(『読売新聞』大正十一年一月十四日)
- (4) 『現代日本美術界』(中央美術社、大正十四年九月) 一四六頁。
- (5) 中川紀元「春陽会を見る」(『アトリエ』大正十三年四月)
- (6) 仲田勝之助「春陽会の「日本画趣味」【上】、【中】」(『東京朝日新聞』大正十三年三月十八日、同十九日)
- (7) 「学芸二年 回顧と要望 今年の美術会【一】」(『東京朝日新聞』大正十四年十二月十五日)
- (8) 「解らない事二三 春陽会々務委員に質す【上】、【下】」(『読売新聞』昭和九年七月二十一日、同二十三日)
- (9) 「どうして春陽会は林君に出て貰ったか【上】、【下】」(『読売新聞』昭和九年七月三十日、同三十一日)
- (10) 時の文相松田源治が美術界統制の目的で帝国美術院の改組を断行、帝国美術院官制を制定したことに對する批判が各美術団体から噴出し、美術界全体を巻き込む一大事件となった。この動向は「あたかも美術界の非常時を現出、その成行動向はすこぶる注目され」(無記名「新帝展へ果然！爆弾 盟友五氏をも除名 まづ二科会が反旗」(『読売新聞』昭和十年六月二日) るものであった。
- (11) 谷川徹三「国展と春陽会【下】」(『読売新聞』昭和十年五月八日)
- (12) 外山卯三郎「国展と春陽会(一)」(『東京朝日新聞』昭和十年五月十一日)
- (13) 「国画会と春陽会(二)」(『東京朝日新聞』昭和十一年四月十八日)
- (14) 「塗つてある絵 魅力ある版画挿画 春陽会展評」(『東京朝日新聞』昭和十一年四月二十六日)
- (15) 「曇天の倦怠き 第十六回春陽会展評」(『東京朝日新聞』昭和十三年四月十九日)
- (16) 山崎省三「雑編」(『雑報』第十回展覧会第一号)に「二号東京大阪にて二万余宛宛刷る印刷所の記録に拠れば既刊全数十万余部といふ勘定であるが、その十何万部の雑報といふものが一人一部宛会場から持ち運ばれて何処へどうなつて行くのであるか(略)この雑報に限つて上野の山下あたりに決して棄て去られてゐるのを見かけなかつた」とあり、『雑報』は来観者に好評だつたことがうかがえる。
- (17) 例えば「そろひもそろつて陰気くさい小さな絵が「こゝは春陽会だぞ」といはぬばかりに、肩をゆすつてささやき交してゐるやうに覺えた」(坂崎坦「春陽会二めぐり【上】」、『東京朝日新聞』大正十五年三月九日)、「大きな展覧会場に入ると気持があはてだして、落つて小さな絵の小味なところまでくみ取ることが出来ない」(中川紀元「春陽会と国展【二】」(『東京朝日新聞』昭和二年五月十日)といった批評。
- (18) 「今春の作品に著しい東洋精神」(『東京朝日新聞』大正十五年二月二十四日)
- (19) 「春陽会と国展とは春にひらく姉妹的展覧会とも言へるがその内容も又よく似てゐる。こゝでは「独立」や「二科」の一部に見る破格奇詭な作品もなにかはり、又帝展に見る純粹アカデミズムの作品もない。一言にして云へば穩健中道を歩む写実主義乃至自然主義の作品が主潮をなしてゐる。国画会には異色ある工芸部があるがこゝでは又挿絵草稿及び水墨を主とした自由日本画の製作が呼物の一つともなつてゐる。」(川路柳虹「春陽会を觀る」、『読売新聞』昭和九年四月二十七日)
- (20) 「挿絵といふ名は、勿論、文に属する謂だが、文を伴つてもよし、ただ絵だけでも、挿絵的な自由製作、それを専らにする発表機関——雑誌——があつてもよい筈だ。(略)それ自体独立して、展覧会芸術、床の間芸術以外に、一々内容に応じた版式で、今云つたやうに絵ばかりでもよし、文あれば更に

賑やかに、前記、石井氏、木村氏乃至小杉放庵氏、中川一政氏、その他其道練達の士を集めた春陽会では、世間謂ふところの挿絵室をとうに作つてゐる。

一会の一室のみでなく、汎く天下に、挿絵室あつて然るべきである。(『鐫木清方「挿絵今昔譚」、『中央公論』昭和七年九月。引用は『鐫木清方文集』二、白鳳社、昭和五十四年十一月、二五四頁)

(21) 「雑誌界の人物(三二)」「アトリエ」主幹北原義雄氏(『読売新聞』大正十五年八月十六日)。記事には「今では二科会の連中にまで好意を評されているとある。

(22) 『雑報』には名前が見えないが、大正五年に『万朝報』を退社後在野の美術評論家として活躍した脇本榮之軒も春陽会と親しい交際のあつた一人。たとえば「春陽会にも私の好きな人や知つて居る人はいくらも居る。小杉君も絵は今一息だが、人間は好きである。森田君、長谷川君、倉田君、石井君、真田君、それから山本君の顔も知つて居るし、小穴君にはいつか北原さんの所で芥川さんに紹介された」(『春陽会を觀る(一)』、『読売新聞』大正十五年二月二十八日)という叙述。なお芥川はこの年の春陽会展に足を運んでいる。「北原さん」は北原義雄(先出注②)の兄でアルス社(前身は『羅生門』の発行元阿蘭陀書房)代表の北原鉄雄か。

(23) 『春陽会第九回展覽会目録』によれば、足立源一郎「山山人間さし糸十点」、中川一政「葉桜(岸田国士さし糸)」、「屋上庭園(同)」、「頼母しき求縁(同)」、「南国太平記さし糸」、裕伊之助「夜ふけの客人二点」、「蒼さめた太陽三点」(以上第十一室)、木村莊八「祖国は何処へ(時事新報挿画)」、「ラグーザお玉(東京日日新聞挿画)」、「女獣心理(都新聞挿画)」、倉田白羊「都新聞さし糸」五点(以上十二室)などが出陳されている。

(24) O・H・S「春陽会の挿画室」(『アトリエ』昭和二年五月)

(25) 「挿絵の絢爛時代」、『近代挿絵考』(先出、第三節①)五九頁。「山」は上野の美術館に陳列される展覽会用の作品を指す。

(26) 雪俗と個人的に親交があり当時の『都新聞』文化部とも親近の間柄であつたことから、一時的に莊八が挿絵を担当したが、その後も「吹き替へに登場

した筈の僕がそのまま、長いこと本役に据ゑ直」ることとなつた(先出『近代挿絵考』「後記一束」、三二二頁)。

(27) 山下新太郎「鶴三氏の挿絵」(『東京日日新聞』大正十四年十二月二十二日)

【別表】『春陽会雑報』所収記事一覧

- ・「仮番号」は石井鶴三関連資料整理のために付された番号。重複して同じものが保管されている場合はその番号も記した。
- ・発行年月日の記載なきものは、記事の内容から判断して発行年を「」内に記した。
- ・表内の記載事項は上から順に、記事標題・執筆者・会員会友の区別（所属があれば記載）・記載頁とする。
- ・記事の内容から推測される執筆者名を「」内に記した。

第六回展覧会第一号（仮番号「馬場58-516」）		第六回展覧会第二号（仮番号「印未1-7」）	
【発行年月日】記載なし（昭和三年）	【発行年月日】記載なし（昭和三年）	【発行年月日】記載なし（昭和三年）	【発行年月日】記載なし（昭和三年）
【発行所】東京市外田園調布四二四 春陽会	【発行所】東京市外田園調布四二四 春陽会	【発行所】東京市外田園調布四二四 春陽会	【発行所】東京市外田園調布四二四 春陽会
【印刷所】東京市芝区南佐久間町二ノ十八 廣瀬印刷所	【印刷所】東京市芝区南佐久間町二ノ十八 廣瀬印刷所	【印刷所】東京市芝区南佐久間町二ノ十八 廣瀬印刷所	【印刷所】東京市芝区南佐久間町二ノ十八 廣瀬印刷所
第六回展覧鑑査の光景（写真）	春陽会の地位及特色	会員芸風	萬鉄五郎君の遺作室内鑑査に就て
山本鼎	小杉放庵	小林徳三郎	木村荘八
会員	会員	会員	会員
1	1	2	3
春陽会回顧	和服に番茶の味	サロンのはなし	厦門の旅
金井紫雲	田澤良夫	足立源一郎	田中善之助
都新聞社	毎夕新聞社	会員	会員
4	4	5	6
りうぜつらんどでいこの花	山崎省三	会員	森田恒友
1	1	1	1
素描と素描室	森田恒友	会員	1

入選画に就て	アネモネ時代	六法全書	挿絵及び挿絵室に就いて	私の油絵のかき方	字で描く会員の肖像	内ノリ外ノリ（2）	休憩所のソファアールから	第三室の諸作品	春陽会の人達	卓上小語	メガホン	第七回展覧会第一号（仮番号「馬場58-518」）	本郷燕楽軒に於ける創立記念写真（写真）
中川一政	無記名	無記名	石井鶴三	放庵	岡本一平	無記名	時岡弁三郎	木下孝則	外狩素心庵	今関啓司	無記名	【発行年月日】記載なし（昭和四年）	〔右は誤記。七周年記念の正月の集合写真。第十一回展覧会号編集後記に訂正あり。〕
会員			会員	会員	会員		東京朝日新聞社	会員	中外商業新報社	会員		【発行所】市外田園調布四二四 春陽会	森田恒友
2	2	2	3	3	4	4	6	6	7	8	8	【印刷所】芝区南佐久間町一ノ一 研文社印刷所	小山敬三
七周年を迎へた春陽会	春陽会美術講演会（告知）	仏蘭西見聞	七年回顧	モラン川	感想	山居苦楽	昭和四年四月二十二日於美術館春陽会（挿絵）	憚乍ら憚らずに	相撲雑談	石井鶴三	一平写	倉田白羊	小林和作
1	1	2	2	3	3	3	6	7	8	1	1	2	3
鬼頭豊二郎	木村荘八	小林和作	倉田白羊	一平写	外狩素心庵	石井鶴三	中外商業	1	1	1	1	1	1

来観者諸君！	山本鼎		1
春陽会美術講演会(告知)			1
雁燕同時	永福(中川一政)		2
昇君の仕事	放庵		2
鹿老一口噺	無記名(鹿島龍威)		2
小学校へ通ふ年齢	田澤良夫	毎夕新聞	3
彫刻と大画の無き事	孤峰莊主人		3
春陽会算術	無記名		3
あれやこれや	金井紫雲	都新聞	4
春陽会美術講演会(告知)			4
政界電話	無記名		4
キヤルチエーダルチス	足立源一郎		5
早起き	無記名		5
なほもうろく	無記名		5
無言洋行	無記名		5
ネクタイ	無記名		5
相身互	無記名		5
夫情	無記名		6
遅刻	無記名		6
老人英学	無記名		6
集会一	無記名		6
集会二	無記名		7
自分の出品(小林和作・鬼頭甕二郎・林俊衛・中川一政・山崎省三・石井鶴三・今関啓司・木村莊八・小林徳三郎)	上記の通り		7

第七回展覧会第二号(仮番号「馬場58-519」)

【発行年月日】記載なし(昭和四年)

【発行所】市外田園調布四二四 春陽会

【印刷所】芝区南佐久間町一ノ一 研文社印刷所

今昔位付け	小杉放庵	会員	1
喫煙室	碓伊之助	会員	2
贅言	田澤良夫	毎夕新聞社	3
春陽会研究所実写	小林徳三郎	会員	4
春陽会夜間講習会実況(写真)			4
元氣無類禮讃	金井紫雲	都新聞社	5
海	鬼頭甕二郎	会員	5
会談一束	木村莊八	会員	6
リラの花咲く頃	足立源一郎	会員	8
春陽会夏期洋画講習会(告知)			9
第八回展覧会第二号(仮番号「印末1-9」[切抜2-48])			
【発行年月日】記載なし(昭和五年)			
【発行所】記載なし			
【印刷所】記載なし			
第八回展覧会記念集合(写真)	山本鼎	会員	1
鑑画御案内	小杉放庵	会員	2
後赤壁	鹿島龍威		2
展覧会の御客様	田澤良夫	毎夕新聞社	3
事務室の小半日	石井鶴三	会員	4
研究所雑感	無記名		4
第八回展覧入賞者	無記名		4
カメラマン/同情/罰金制/帽子からうつる	無記名		4
新選いろはかるた	中川一政	会員	5
碓君雑談	小山敬三	会員	5
フランスの免状	無記名		5

編集後記

無記名

8

第八回展覧会第一号(仮番号「馬場58-520」[切抜2-47])

【発行年月日】昭和五年四月廿一日

【発行所】東京市外田園調布四二四 春陽会

【印刷所】牛込区富久町一八 芳文堂印刷所

批評に就いて	小林和作	会員	5
春陽会夜間講習部見たまゝ	第一回生L・M・N		7
春陽会夏期洋画講習会(告知)			7
第九回展覧会第一号(仮番号「馬場58-522」)[切抜49]			
【発行年月日】昭和六年四月十一日			
【発行所】編輯兼発行者 東京市外板橋区中丸二六六 石井鶴三「馬場58-522」には住所記載なし			
発行所 東京市外田園調布四二四 春陽会			
【印刷所】牛込区富久町百十八 芳文堂 孝井亀之助			
展覧会の財政	小杉放庵	会員	1
歐洲油絵の前を横切る	山崎省三	会員	2
滞仏春陽会人の集合(写真)			2
馬鹿なこと	無記名		3
御願する事二三	鹿島龍蔵		3
放庵小太刀の由来	無記名		3
素描	森田恒友	会員	4
春陽会明るくなる(挿絵)			4
同姓同名喰ひ違ひ	倉田忘齋		4
挿絵	石井鶴三	会員	5
長谷川医学博士	無記名		5
百人一首評釈(上)	春陽堂上梓 〔中川一政〕		6
一政先生百人一首を知らず?	無記名		6
挿絵室禮讚	金井紫雲	都新聞社	6
一游亭雜記	小穴隆一	会友	7
五ヶ所国府	鬼頭甕二郎	会員	8
面の不思議	坂口右左視	会友	8
会務経過	木村荘八	会員	9
会務委員会友懇談会(写真)			9
研究所一週年記念祭仮装会(写真)			9

雑感	国盛義篤	会友	10
研究所記事	無記名		10
研究所講習会実況(写真)			10
春陽会洋画研究所講習部規定(告知)			10
「馬場58-522」には「春陽会夏期洋画講習会(告知)」の記事			
第九回展覧会第二号(仮番号「馬場58-523」)			
【発行年月日】昭和六年四月廿五日			
【発行所】編輯兼発行者 東京市外代々木上原一、二一 山崎省三			
発行所 東京市外田園調布四二四 春陽会			
【印刷所】牛込区富久町百十八 芳文堂 孝井亀之助			
集合写真(写真、説明なし)			1
ループルと展覧会	中川一政	会員	1
古南画	放庵	会員	2
美術の小農国	無記名	会員	2
版画室	山本鼎	会員	2
挿絵室について	木村荘八	会員	3
出品者懇親会(写真)			3
百人一首評釈(下)	春陽堂上梓 〔中川一政〕		4
とんだ折紙	田澤良夫	毎夕新聞社	4
第九回展受賞者及び会友推薦	無記名		5
素描出品者諸君へ	今関啓司	会員	6
出品画に就て	小林和作	会員	6
無題	山崎生		6
萬鉄五郎君の遺作画集出版について	小林徳三郎	会員	7
身辺雜記	横堀角次郎	会員	7
雨降りお天気男	無記名		7
三曜会とは?	木村荘八		8
春陽会夏期洋画講習会(告知)			8



第十回展覧会第一号(仮番号)〔馬場58-524〕				
【発行年月日】昭和七年四月廿三日				
【発行所】編輯兼発行者 東京市外代々木上原一〇二一 山崎省三				
発行所 東京市外代々木上原一〇二一 山崎省三				
【印刷所】牛込区富久町二一八 芳文堂 孝井亀之助				
集合写真(写真)〔第一回展覧会の集合写真〕	山本鼎	会員		1
十周年回想	倉田白羊	会員		1
最早十年か	小林徳三郎	会員		2
春陽会々員の血液型	小杉放庵	会員		3
評判	前川千帆	会員		4
春陽会十年絵史(挿絵)	無記名			5
ラヂオ今日の放送番組〔架空の番組、以下6頁の7頁の記事はこれに関するもの〕	和田堀社中			6
音曲吹よせ	足立源一郎			6
アマゾン川の御話をする	生			6
馬占山の横顔	岡本一平			6
おいしい味噌汁の作り方	石井鶴三			6
女子参政権と禁酒運動 しず枝女史肩を聳やかして語る	〔林俊衛〕			6
三勇士の忠義	山本鼎			7
〔山水彷徨〕秘曲を放送する放童師	〔小杉放庵〕			7
赤城の血煙	桃中軒角丸			7
	〔横堀角次郎〕			7
ジャズ・スリーキッスの中の合唱	無記名			7
野菜の知識	森田恒友			7
感度のよいはる日真空管(架空の広告)				7
私の出品画	小林和作	会員		8
編輯雑記	山崎生			8
会務経過	木村莊八	会員		9
三曜会を語る	遠見			9

春陽会洋画研究所講習部規定(告知)				
第十一回展覧会号(仮番号)〔馬場58-525〕〔印末1-10〕				
【発行年月日】昭和八年四月廿三日				
【発行所】編輯兼発行者 東京市杉並区和田本町一〇五二 木村莊八				
発行所 東京市大森区田園調布都市四二四 春陽会				
【印刷所】牛込区富久町二一八 芳文堂 孝井亀之助				
大正十一年一月十四日発会式記念(写真)	放庵			1
芸術進歩せず	鳥海青児			1
〔特別室に就て〕又は「滞欧雑感」	栗田雄			2
回想断片	加山四郎			2
禮讓	別府貫一郎			3
『ラ、テムベスタ』を見る	倉田白羊			3
小談五つ	林俊衛			4
この頃のこと	山崎省三			4
ある「緒言」の一齣	外狩素心庵			5
いゝ画・いゝ作品	田澤田軒			6
勝手放談	石井鶴三			6
国定忠治の風貌	孤峰莊主人			7
大きに御世話	金井紫雲			8
断雲居から	小林和作			8
私の父	前川千帆			9
非常時日本の美術出品画 肖像献金宝庫	鬼頭壘二郎			9
志州甲賀にて	中川一政			10
旅行癖	小山敬三			10
白鷺城を描いて	今関啓司			11
春雨	貴麿生(木村莊八)			11
編集後記	無記名			12
森田恒友の訃報				12

第十二回展覧会号 (仮番号「馬場58-5256」) 【発行年月日】昭和九年四月廿一日 【発行所】編輯兼発行者 東京市滝野川区田端三二一 水谷清 発行所 東京市大森区田園調布都市四二四 春陽会 【印刷所】牛込区富久町二一八 芳文堂 孝丹亀之助			
昭和九年三月八日森田恒友墓参会(写真)	石井鶴三		1
現代日本を代表する絵画	足立源一郎		1
森田恒友遺作室油絵	放生		2
写真(故森田恒友 昭和七年十一月写)	黄紫生		3
水墨平野人	倉田白羊		3
倉田山中論(会員人物対評)	長谷川昇		4
山本鼎戒心せよ(会員人物対評)	足立源一郎		4
足立君寸感(会員人物対評)	放庵		5
長谷川昇(会員人物対評)	貴塵生(木村 庄八)		5
転向	林俊衛		5
林大人と倭衛さん(会員人物対評)	別府貫一郎		6
貴塵館を短見す(会員人物対評)	今関啓司		6
今関啓司論(会員人物対評)	石井鶴三		6
別府君(会員人物対評)	中川一政		7
中川一政を評す(会員人物対評)	横堀角次郎		7
石井鶴三(会員人物対評)	鶴三写		8
放庵先生雜感(会員人物対評)	鳥海青児		8
春陽三新人(挿絵)	水谷清		9
水谷禿るの状(会員人物対評)	孤峰莊主人		9
露出症鳥海(会員人物対評)	山崎省三		10
横堀角さん(会員人物対評)			10
小林徳三郎論(会員人物対評)			10

皇国雜説阿呆陀羅經	白羊尊者述 木莊阿闍梨画 (倉田白羊・木 村庄八)	10
会務経過	木村生	12
編集後記	水谷記	12